

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：34531

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K14277

研究課題名(和文) 地方看護学生の卒業を阻害する初年次要因の探索と看護師適性の指標化

研究課題名(英文) Exploring first-year factors that inhibit the graduation of local nursing students and Indicators of nursing aptitude.

研究代表者

高見 栄喜 (TAKAMI, Hidenobu)

関西看護医療大学・看護学部・助教

研究者番号：30632731

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)： コロナ禍前の3年間に入学した地方看護学生(313名)を対象とした研究から、標準年次での卒業を促進させる初年次要因は、毎日の朝食摂取と、良好な友人関係が、また女性では、毎日の朝食摂取と、生活全体の満足度が規定要因であった。標準年次での卒業に対する阻害要因は、毎日朝食を食べる習慣がない者や、ストレス度が中程度に高い者であった。

コロナ禍前であるが、地方看護学生での標準年次での卒業に有効な初年次での看護師適性指標は、毎日の朝食習慣があること、良好な友人関係、生活満足度が高いことが挙げられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

コロナ禍前に入学した地方看護学生を対象とした研究から、標準年次での卒業には、入学当初の早期から、毎日朝食を摂る規則正しい生活リズムや、スムーズに友人関係が築けるよう、過度に学生のストレス度が高まらないように配慮し、教育環境面や心理面などからのサポートの重要性が示唆された。

コロナ禍前後での初年次要因の比較では、コロナ禍後の学生の方が、生活満足度や生きがい度が高かった。しかし、我々の研究では、2年次への進級までに学生のストレス度が高まることも分かっている。したがって、コロナ禍後の新入生のポジティブな心理状況の変化に注目し、全員が標準年次で卒業し、新人看護師を早期に輩出する意義は大きいと考える。

研究成果の概要(英文)： Results of a study of local nursing students(313 students) enrolled in the three years prior to the Corona disaster showed that the following were determinants. Daily breakfast intake and good friendships were the first-year factors that promoted graduation in the standard year, and for women, daily breakfast intake and total life satisfaction were the determinants. Inhibitors to the graduation in the standard year were those who were not in the habit of eating breakfast every day and those with moderately high stress levels.

Although this is before the Corona disaster, effective first-year nursing aptitude indicators for the graduation in the standard year for local nursing students include having a daily breakfast habit, good friendships, and high life satisfaction.

研究分野：公衆衛生教育科学

キーワード：標準年次での卒業 初年次因子 地方看護学生 コロナ禍前後の入学生 卒業阻害要因 卒業促進要因
看護師適性指標

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初の全国の大学における標準年次での卒業(平成28年度)は87.3%、本研究の対象者が含まれる保健分野(看護)の標準年次での卒業では、92.2%と全体平均よりも高い水準である(文部科学省,2016)。しかし、本研究の対象であるA大学では、地方在住の看護学生の標準年次での卒業(平成28年度)は約7割程度であり、看護領域全体より2割程度低い結果であった(文部科学省,2016)。この背景には、留年や休学、退学で標準年次の卒業や進級ができない学生が多数存在していることが推測される。しかし、標準年次の卒業に不可欠な看護系を専攻した入学生の初年次の資質に関する研究蓄積は、少ないのが現状である。

2. 研究の目的

本研究では、地方の看護学生での進級や卒業を阻害する要因とその構造について、初年次での資質(個人的属性と生活習慣、精神的健康度)との関連から解明し、早期からの健康教育や学生支援等を通じて、入学生全員が標準年次で看護師資格を取得し、地方の看護師不足解消に役立つ基礎資料を得ること。また地方の看護系大学選択に有効な看護師適性指標を創出し、適切な入学者選抜に役立てることを目的とする。

また令和2年以降の新型コロナウイルス感染症(COVID-19)流行拡大により、新入生にも感染予防のため社会的距離の確保や遠隔講義など様々な要因からの影響があると推察され、COVID-19流行前と流行後での学生の初年次因子の変化や、その特徴を検討することも研究目的とした。

3. 研究の方法

(1)令和元年度の研究¹⁾では、A大学における看護専攻の平成28・29・30年度の1年生、合計312名を対象に質問紙調査を実施し、有効回収率は99%であった。従属変数を進級(2年次)と退学の有無とし、独立変数をストレス度、生きがい度、GHQ12の4区分、および主観的幸福感(家族関係)の3区分を設定した。進級と退学の有無に対する各独立変数の影響力を測定するため、ロジスティック回帰分析を用い、各独立変数での低い群を基準として、高い群でのオッズ比を算出し検討した。調整項目を性別、年齢、BMI、喫煙習慣および飲酒習慣(有無)に設定した。

(2)令和3年度の研究²⁾では、A大学における看護専攻の令和元年度(102名)と令和3年度(103名)の1年生、合計205名を対象に質問紙調査を実施し、有効回収率は99%であった。COVID-19流行前後の比較では、アウトカムを主観的幸福感(生活環境、健康、余暇、経済面、生活全体)、睡眠時間、勉強時間(平日)、net使用時間(平日)、生きがい度、ストレス度とし、カイ二乗検定、Mann-Whitney検定およびt検定にて分析した。また、独立変数を、主観的幸福感(5変数)・睡眠・勉強・net使用に、従属変数を、精神的健康(生きがい度、ストレス度)に設定し、ステップワイズ法による重回帰分析で、精神的健康に対する独立変数の影響度合いを算出し分析した。

(3)令和4年度の研究³⁾では、A大学の看護専攻の平成28・29・30年度の1年生、合計313名を対象に質問紙調査を実施し、有効回収率は99.4%であった。従属変数を卒業の有無とし、独立変数に満足度(友人、生活全体)の2区分、朝食習慣、ストレス度、生きがい度、GHQ12の3区分を設定した。ロジスティック回帰分析にて、卒業に対する独立変数の影響度合いと、卒業の有無に対する各独立変数の影響力を、各独立変数での基準群に対する各群でのオッズ比で測定し、性別、年齢、BMI、喫煙・飲酒習慣(有無)を調整因子とした。

4. 研究成果

(1)令和元年度の研究¹⁾の主な結果は、2年次進級の有無に対するストレス度の調整後での高値群のオッズ比は、0.29(95%CI:0.10-0.81)、GHQ12では0.28(0.10-0.79)で、有意な負の関連が認められた。また退学の有無に対するGHQ12の調整後の高値群のオッズ比は、2.84(1.01-8.02)で、有意な正の関連が認められた。一方、家族関係では、0.21(0.08-0.55)で、有意な負の関連が認められた。

予備調査でストレス度やGHQ12などの精神的健康度は、1年後期時点の方が、入学当初よりも有意に低下していた。入学時点で精神的健康度が低い学生は、学生生活を通じてさらに低下し、2年次への進級を阻害し、退学のリスクを高めると推察される。また、彼らに対して、早期から家族との良好な関係性の構築や、生きがいを感じられるような教育的配慮や指導の有効性が示唆された。

(2) 令和3年度の研究²⁾の主な結果は、COVID-19後の学生の方が、COVID-19前より、健康と余暇(0.1%水準)、生活環境と生活全体(1%)、経済面で(5%)有意に満足度が高く、睡眠(0.1%)とnet使用(5%)で有意に長く、生きがい度(1%)も有意に高かった。また、生きがい度のCOVID-19後の学生では、生活全体(標準偏回帰係数:0.50)、COVID-19前では、経済面(0.27)と勉強(0.21)に、ストレス度の同後では、経済面(-0.24)と健康(-0.24)、同前では、生活全体(-0.31)、睡眠(-0.21)と余暇(-0.19)に、それぞれ規定力があった。

COVID-19後の新入生の方が、健康・余暇・環境・経済面などの生活全体での満足度が高く、睡眠やnet使用も長く、生きがい度も高かった。コロナ禍での新入生の方が、よりポジティブな心理状態であることが分かった。先行研究では、入学当初から徐々に学生のストレス度が高まることになっており、今後、対面講義などが増え、睡眠や余暇時間などの減少も予測され、生きがい度にも負の影響があると推察される。

(3) 令和4年度の研究³⁾の主な結果は、標準年次での卒業に対して朝食習慣(2.10)と友人(0.30)、女性では、朝食習慣(3.47)と生活全体(0.13)に規定力があり、判別率率は、順に73.8%と75.8%であった。朝食習慣・ストレス度と卒業の有無の関係では、調整後での朝食習慣(時々食べる群)のオッズ比は、0.46(0.25-0.86)、調整後でのストレス度(中値群)のオッズ比は、0.46(0.24-0.90)とそれぞれ有意な負の関連があった。

標準年次での卒業には、入学当初の早期から毎日朝食を摂り、スムーズに新しい友人関係が築けるよう、学生の環境・心理面などからサポートの重要性が示唆された。我々の先行研究では、コロナ禍後の新入生の生活満足度が高い傾向があった。コロナ禍前後の相違を考慮し、朝食摂取の習慣化や、仲間づくり機会の創出などを通じて、入学生全員の標準年次での卒業や、新人看護師を早期に輩出することに寄与する研究の蓄積が求められる。

< 引用文献 >

1) 高見栄喜, 小出水寿英「地方看護学生の進級と退学に関連する初年次要因の検討」第78回日本公衆衛生学会総会, 2019, 抄録集, p524.

2) 高見栄喜, 小出水寿英「COVID-19流行前後での地方看護学生の初年次要因の検討」第80回日本公衆衛生学会総会, 2021, 抄録集, p459.

3) 高見栄喜, 小出水寿英「卒業を規定する初年次因子の検討 - 3年間の地方看護学生調査 - 」第81回日本公衆衛生学会総会, 2022, 抄録集, p413.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高見栄喜
2. 発表標題 COVID-19流行前後での地方看護学生の初年次要因の検討
3. 学会等名 第80回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高見栄喜
2. 発表標題 地方看護学生の進級と退学に関連する初年次要因の検討
3. 学会等名 第78回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高見栄喜
2. 発表標題 卒業を規定する初年次因子の検討 - 3年間の地方看護学生調査 -
3. 学会等名 第81回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------